



第7709号

2023年1月23日(月)

## 阪神淡路大震災、語り継ぐ使命感

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

### ◆情報が県民に伝わるように

阪神淡路大震災から28年となる1月17日、今年も各被災地で追悼行事が開かれた。

筆者は震災当時、広報の専門職として兵庫県庁に勤務しており、発災直後から県災害対策本部からの情報を、テレビ・ラジオを通じて県民に発信するという役割を担った。

刻々と変化していく状況に合わせ、今、必要とされている情報を見極めつつ、確実に情報が届くように言葉を選び、聞きやすいよう、安心してもらえるように声のトーンや話す速さにも注意を払った。その時、筆者を突き動かしていたのは、「伝わらなければ何もならない」という使命感だ。情報は言ってみれば命綱。一言、一声もおろそかにしてはいけない。この時の体験が、伝わる声と話し方の講師という現在の仕事の原動力にもなっている。

今年の神戸の追悼行事では、並べられた灯籠で「むすぶ 1・17」というメッセージが浮かび上がった。震災を知らない世代も一緒になって、人と人、場所と場所、思いと思いを結び、伝えていこう、という思いが込められたものだ。

### ◆大学生の議論にがくぜん

伝えていこう…。何を伝えていけるのかと自分に問い直したとき、最近、大学の授業で「阪神淡路大震災が起きた直後、必要とされたものは何か」をテーマにグループディスカッションをさせた時のことを思い出した。学生たちが生まれる前の震災だが、防災教育なども受けている世代だし、毎年報道もされるので、それなりにイメージ出来るだろうと思っていた。

懐中電灯やラジオ、飲料水など実際に役立ったものを例として挙げておいたのだが、「すぐに明るくなるから懐中電灯は要らないのでは」「ラジオよりネットの方が情報は早い」「冬だから水は優先順位が高くない」などの意見が交わされていて、がくぜんとした。

震災発生は午前5時46分、夜明けまで1時間以上もある。下から突きあげられる激しい揺れにすぐに地震とは認識できず、何が起こったか分からない。電気もガスも水道も電話も寸断されている。インターネットも携帯電話もまだ普及していない。そんな時代であったという前提、その時の心情に全く思いが及ばない様子なのだ。中に「祖母から水が止まっていてトイレの水も流せなくて困ったと聞いた。水は備蓄しておくべきだ」などの意見も出て、身近な人の話を通して追体験することが、震災を自分たちのこととして捉えることにつながり、次の災害に備える知恵になるのだと感じた。

### ◆語ることで未来に種をまける

昨年の1月17日はカルチャーのスピーチ講座の日だった。ある受講者が、自宅で崩れた壁と壁の間に挟まり、九死に一生を得た体験を話すと、他の受講者たちも自身の体験を語り始めた。

家族や友を失った人、ボランティアに駆け付けた人など、被災の程度は違っても、それぞれが「語り部」だ。でも口をそろえて「これまで震災の話はしたことがない」と言う。自分よりつらい目にあった人も数多(あまた)いるのに自分が語ることは後ろめたく、ふたをしてきた、と。筆者も同じだった。

震災直後に出来た語り部グループの中には、メンバーの高齢化等で活動に幕を下ろすところもあると聞く。胸にしまった震災体験を折に触れて語ることで、未来に何らかの種をまけるのではないか。自分なりに伝えていきたい。28年たって、新たな使命感が胸に宿った。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003